サンケイ新聞

浪花ぐらし

大阪のおばちゃん3万人の愛

年末の一大イベントは、タイガースのコンサートだった。44年ぶりに創立メンバーがそろう注目の復活イベントはいま全国を縦断中。17日が京セラドーム大阪だった。

5年前にジュリー（沢田研二）の還暦コンサートに行って感激した仲間が早めにチケットを押さえ、総勢10人で会場に駆けつけた。周囲は同じような濃い色のダウンコートにブーツで防寒した同年配の女性が3万人。球場を埋め尽くす姿は壮観だ。

開演前、仲間で三々五々思い出話を始める。タイガースが活躍したのは昭和42年から46年までの4年間。当時10代後半から20代の学生だった私たちの中でコンサートに行ったり、追っかけをしたりした人は意外にいない。ごくやとなしい聴衆。でも、当時の写真が満載されたパンフレットを見ていると、みんなタイガースのファンだったと確信する。フリルのシャツやぴたぴたズボンをはき、精いっぱいの笑顔を振りまく5人のかわいいこと、懐かしさに胸がいっぱいになる。

今回の復活コンサートにいたる経緯は多くの報道で知らされた。アイドル路線に反発して人気絶頂のタイガースを脱退した加橋かつみ、音楽以外の道を模索しタイガース解散の引き金を引いた瞳みのる、ずっとタイガースへの思いを抱えてきた森本太郎、俳優として独自の地位を確立した岸部一徳。それらメンバーのこだわりや確執を解きほぐし再結成に動いた沢田研二。どれもこれも心に響く。

コンサートはローリングストーンズの「タイム・イズ・オンマイサイド」で幕開け。ノリのいい洋楽に、いきなり総立ちだ。

「大阪のジャズ喫茶・ナンパー番で初舞台を踏んだ5人が四十数年ぶりに大阪に帰ってきましたぁ」というジュリーのあいさつに万雷の拍手。おかえりぃ、タイガース。3万人の大阪のおばちゃん愛が舞台めがけて降り注ぐ。

後はもう、至福の時間。「花の首飾り」「君だけに愛を」「シーサイド・バウンド」とかつてのヒット曲に、年齢も時間も忘れて陶酔する。トッポ（加橋かつみ）の頭髪がすっかり白くなっていても、ジュリーのおなかがでっぷりふくらんでいても、いい、いい。みんなよく頑張ってきたよね。

明日からの活力がまた湧いてくるすてきな時間だった。

（編集委員・石野伸子）